



新潮新書

Brevity is the soul of wit,
and tediousness the limbs and outward flourishes.

青樹明子

AOKI Akiko

日中ビジネス摩擦

新潮社
014



青樹明子 愛知県生まれ。早稲田
大学文学部卒業。ノンフィクショ
ン作家。北京師範大学と語言学院
に留学後、北京放送に3年間勤務。
著書に『日本の名前をください
——北京放送の一〇〇〇日』など。

⑤ 新潮新書

014

につちゆう ま さつ
日中ビジネス摩擦

著者 あおきあきこ
青樹明子

2003年5月20日 発行

発行者 佐藤 隆 信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71番地
編集部 (03) 3266-5430 読者係 (03) 3266-5111
<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Akiko Aoki 2003, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが
小社読者係宛お送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-610014-2 C0233

価格はカバーに表示してあります。

112
F-7221
682

㊦ 新潮新書

青樹明子

AOKI Akiko

日中ビジネス摩擦



Yaf93/12159

014

B/BF-51/07

新潮社

NB

2003年9月18日

* 一元は約十五円（二〇〇三年四月現在）

日中ビジネス摩擦 ● 目次

プロローグ——中国から帰ってみると

7

五年ぶりの日本。何かとカルチャーギャップを感じる日々が始まった。

第1章 思わぬことが民族差別に——日本航空の試練

14

懸命に手配した夜食のサンドイッチ。精一杯のサービスがなぜ中国人から「日航・悪夢の旅」と猛反発を浴びてしまったのか。

第2章 信用経済は成立しない——東方リースの悲劇

42

ファイナンス・リース。国営企業相手のこの新商売は債権回収でつまずいた。法律の未整備ゆえではない。問題は法律が機能するかしないかにあったのだ。

第3章 行政処罰を怖れるな——北京遊楽園の奮戦

59

ナニ、儲けすぎたから罰金を払え？ 知らないよ、そんなもん——。四個不（不合理、不公平、不誠実、不愉快）に挑んだ江戸っ子ビジネスマン。

第4章 ショー・ビジネスは可能か——劇団四季の挑戦

77

日本とはなにもかもが絶望的に異なっていた。はたしてこの土地で
合作ミュージカル『美女と野獣』を上演することは可能だろうか。

第5章 広報のプロを——東芝中国の教訓

99

今やトラブルは弁護士だけでは解決できなくなっている。ノートパ
ソコン事件で揺れた東芝中国はいかにして再建の道を歩んだのか。

第6章 同文同種は錯覚である——北京師範大学の選択

114

言葉の感覚も異なれば、もてなしの感覚も異なる。名門の北京師
範大学が日本の新設大学を姉妹校に選んだのには理由があった。

第7章 ニセモノと闘え——日系企業の難題

128

模造品にやられて大きなダメージを受けるか、もしくは彼らを摘発
し叩きのめすか。中国進出企業にとっては二つに一つのサバイバル。

第8章 無料は投機を煽る——日本的商法の陥穽

152

福引き、商品の無料配布……。日本ならどこでも見られる賑わいだが、ときにそれは暴動に発展し、公安（警察）までが出動する結果となる。

第9章 政治から経済・文化へ——日中外交官の声

166

わが外務省にチャイナ・スクールが存在するように、中国外交部にもジャパン・スクールが存在する。外交のプロである彼らは日中関係をどう捉えているのか。

プロローグ——中国から帰ってみると

それは感動的なシーンとなるはずだった。なにしろ延べで五年である。五年にわたる北京での生活に終止符を打つての本帰国で、私自身、胸に迫るものがある。しかも最後の一年は、休暇ですら帰っていない。家族も友人も、絶対歓迎してくれるだろう。

イミグレーションを通過すると、もうそこは日本だった。荷物を待ちながら、私は思いつきり感傷にひたった。

過ぎた日々がよみがえる。

突然留学を決意して、この成田から北京へと向かったのは九五年の夏だった。中国語は話せない、その日泊まる宿さえない、といった無謀な旅立ちである。しかしその後約二年にわたる北京師範大学と語言学院での留学生活は実に楽しく愉快だった。

その夢のような日々が忘れられなかったのか、帰国後しばらくして再びこの空港から北京へ飛んだ。今度は仕事をするためである。職場は中国国際放送局、日本では北京放送の名で知られている。中国国内向けのラジオ日本語放送に携わるのが目的だった。そこで約三年。メインの仕事は番組キャスターである。

そして二〇〇一年一月。後ろ髪を引かれるおもいで北京を離れ、この日成田に到着した。人生におけるひとつのステージが終わったような、かなりおおげさな気分だった。

荷物を受け取り、税関を通して外に出た。

いる。

妹の小さな子供たちが境界線のロープをくぐって私に駆け寄ってくる。父も母もいる。姉も妹もみんないた。一家総出の出迎えである。

「お帰りなさい！」

甥や姪を抱きしめ、両親姉妹と再会の感動を分かち合い、ようやく一息ついた時。改めて私の姿を眺めた妹が、大きな声をあげた。

「ナニ、そのかつこう！」

え？

「そんな床をひきずるコート着て。毛布でもかぶっているみたい。ヘンよ」

北京で作ったコートだった。くるぶしが隠れるくらいまで丈がある。私が北京を発つたその日は、最高気温がマイナス十度という極寒の日だった。北国のコートは、身体全体を覆うのが常識である。しかし周りを見渡すと、日本の女性たちは軽やかでファッショナブルなコートを着ていた。ミニスカートにブーツなどというところでもないかつこの女の子もいる。非常識だわ！ と叫んでも、浮いていたのは私のほうだ。

思えばこれが、五年ぶりに住む日本と私との、カルチャーギャップの始まりだった。日々、どうもヘンである。

冬の晴れた朝、私が鼻歌まじりに洗濯物を干していると、階下の母が不審げな目を向ける。

「ベランダから水がこぼれてくるけど、アンタ何してるの」

え？ 私は手にした洗濯物を見る。たしかに水がしたたり落ちている。水滴は雨漏りのごとく、階下に伝わっていた。洗濯物は絞らずつるす。これは私の常識である。北京

時代はそのまま部屋干しした。乾燥が激しいため、こうすると加湿器がわりにもなる。合理的だわ、と気に入っていたのだけれど、湿度の高い日本で必要なのは除湿器であり、加湿器は迷惑なのである。

湿気の問題ではよくもめた。

シャワーを浴びる。バスルームはシャワーの蒸気で充たされて、ミストサウナのような。ああ、いい気持ち。大きく呼吸をすると、同居の姉が悲鳴を上げた。

「廊下が湿気てる。シャワーの後は、お風呂場の窓を開けてちょうだい！」

そうだった、そうだった。日本と中国は逆である。私は貴重な湿気は部屋にも入れましよう、お風呂場の窓ではなく、部屋側のドアをオープンにしていたのである。

中国から持ち帰ったおやつを食べながら、庭先でボウーツと物思いにふけていたときのこと。目の前を小学生の甥が通る。私は声をかけた。

「中国のお菓子をあげる。ホラ、こうやって、歯で皮を割って、中の実を食べるのよ」
中国人のもっともポピュラーなおやつ、ヒマワリの種だった。食べ方を実演してみせる。すると甥は私を、気味悪そうに見る。

「どうしたの、食べてごらん」

彼は後ずさりした。

「でもそれ、ハムスターの餌だよ」

「……」（日本のハムスターは、こんな贅沢な餌を食べているのか！）

街を歩く。住宅街の小さな交差点。赤信号ながら、車も自転車も走っていない。もちろん渡る。その場に合わせて柔軟に対応するのが中国の常識である。

とその時、私の背中に鋭い声が刺さった。

「ママ、あの人がいけないんだよね。信号が赤なのに渡ってるよ」

「真似しちゃだめよ」

背中を丸めて足早に立ち去った。

中華料理屋さんで、メニューを見ながら「高い、高い」を連発している間は、友人たちも寛容に笑っていた。そりゃ、本場の中国では中華も安いに違いない、まあしばらくはしょうがないだろう、日本の値段に慣れるまでは。

居酒屋で冷しトマトに砂糖をかけても、へえ、と感心していた友人たちだったが、

「飲み物のおかわりは？」と聞かれたとき、「白湯さゆをください」と言い放った私に、さすがに目を丸くした。疲れた胃を休めるには白湯がいい、というのは海の向こうの話で、日本では奇行の部類に入るようだ。

同居の家族はあせり始める。この子は中国で暮らすうちに中国人になってしまった。一刻も早く日本人に戻ってもらわねば。

「廊下やベランダに物を置かないように」（中国人は何故か廊下やベランダを物置がわりに使う）

「お料理に使うニンニクはほどほどにしてちょうだい」（ニンニクを大量にとるのが中国の健康法）

「お皿を取り替えて」（取り皿はめったなことでは替えないのが中国式）

「ゴミの分別方法を勉強すること」（中国にゴミの分別なんてない）

ひと月もすると息切れがし始める。生活習慣の細部にわたって、中国方式と日本方式に違いが出た。

みんな、聞いて！ と叫びたくなる。

——私は五年間、中国社会に同化しようと努力してきただけに。

貧乏留学生のあとは中国人と大差ない給料で暮らした。私が中国人にならなければ五年の生活は成立しなかったのである。

それにしても、と改めて思う。中国と日本は、何と違いが大きいのだろうか。

この数年日本と中国は、政治面、経済面などで、摩擦が特に多くなった。どちらが良くて、どちらが悪いという問題ではない。お互いの「ものさし」が違うだけである。この単純な事実認識なくしての交流は、互いに驚愕と失意の連続となるのではないか。

これから多くの企業、多くの人々が中国をめざして進出していくだろう。そういう方々にぜひ申し上げたい。

中国は日本にとって外国である。

中国にはまず理解が必要である。

中国の特異性を語るのが本書の目的ではない。ビジネス・トラブルの羅列というものもまた違う。私が中国社会で生活している間に見聞きした数々の事例から日中ビジネス・カルチャーの違いを改めて考えてみたいと思う。

第1章 思わぬことが民族差別に——日本航空の試練

忍耐強かった中国人

海外旅行などで「予期せぬ出来事」に見舞われた経験なら、誰しもひとつやふたつはあるに違いない。私にもある。

一九九〇年七月末のこと。イラクがクウェートに侵攻する十日ほど前の、ロンドン・ガトウィック空港だった。ベルリンに向かおうとしていた私は、パンナム航空に搭乗を拒否された。係の英国人女性は爆弾犯を捕まえたかのような怖く緊迫した表情で、私のパスポートをかざして問い詰めてくる。

「アナタ、クウェートに何しに行ったの！」

その三ヶ月前、たまたまアラブ諸国を廻っていたため、私のパスポートにはクウェートだの、UAEだの、バーレーンだのと、派手な色彩のヴィザがべたべた貼られていた。どうやら日本赤軍の疑いアリ、とされたいらしい。屈辱的な対応に頭にきた私は、「帰国したらパンナム航空にクレームをつけよう」と固く決心したが、ベルリンで遊んでいるうちに忘れてしまった。

そしてインドのデリー。予定より六時間ほど遅れて、夜中の三時頃空港に着いたのだが、迎えに来るはずだった旅行社の人がいない。タクシーはほとんどが白タクで、運転手は値踏みするように私を見る。身ぐるみはがされ、暗闇の道路に転がる自分の姿が頭に浮かぶ。もうだめだ。もしも無事生き延びることができたなら、必ず旅行社に文句を言おう、と震える心で誓ったが、生き延びた時点で忘れていた。

八〇年代の中国旅行も試練が多かった。想像を絶するようなトイレへの恐怖とともに、定刻に出発することのない飛行機やら汽車も苦痛の種だった。何故遅れるのか、何時間くらい遅れるのか、ほとんど説明がないまま、ただただ待たされる。いったい客をなんだと思ってるんだ！と毒づきながら周りを見ると、驚いた。いらいらして歩き回って